

呉錦堂を語る会通信

NO.14 Aug. 2014

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2014.8.1



一幅の掛け軸 — 1916年夏、孫を抱き移情閣前の緑陰で涼をとる呉錦堂 —

このNO.14では、呉錦堂に関係した一幅の掛け軸と一枚の写真を取り上げました。前者はこの頁に、後者は第4頁に載せています。掛け軸に関しては、出処も内容もはっきりしているのですが、写真の方は、その内容について疑義の残るものです。しかし、当「通信」は、文字通り、「語る会」の会報ですので、敢えてこの写真を取り上げました。異なった情報をお持ちの方はご提供ください。（編集委員）

《好々爺 — 呉錦堂にこんな側面も —》

呉錦堂を語る会会員 橋 雄三

2012年5月、呉錦堂令孫、呉伯瑄氏宅で興味深い一幅の掛け軸に出会いました。呉錦堂がくつろいだ格好で椅子に腰掛け、膝に幼児を抱いている絵に下のような賛が添えられています。

	此	苦	松	閣	瑛	浴	丙
六	錦	以	中	風	前	納	涼
十	堂	留	得	徐	緑	抱	抱
有	誌	紀	楽	来	陰	於	次
二	時	念	因	自	滿	移	孫
印	年	攝	覺	地	情	伯	望

丙辰（ひのえたつ）は1916年で、「既望」は旧暦16日です。ところで、移情閣の上棟式は、解体時に見つかった幣串の記録から1915年5月12日とわかっております。それから一年余りしか経たない時期です。呉錦堂は、風呂上りに息子啓藩の次男、すなわち、二人目の孫、伯瑛を膝に抱き、新築なったばかりの移情閣前の緑陰で、松林をゆったりと渡る風に身を任せて涼をとっているのです。時に、呉錦堂は（数え）62歳です。そうしていると、苦しい中、自ずと、楽しく、喜びを覚えるというのですが、この時期、呉錦堂に「苦」と言わせたものは何だったのでしょうか。

小さい頃から、大方の苦勞は経験し、逆境に打ち勝ち、その度に大きくなってきた呉錦堂ですから、私たち凡人にとっての「苦」とは、スケール、深さが違っていただでしょう。いくつもの事業に気を配り、日中の国際関係に思いを致す呉錦堂です。「苦」と「生き甲斐」は裏表です。

では、この時期、呉錦堂の心を占めていたのは、一体、どんなことだったのでしょ

うか。その一つに、小束野（現在の神戸市西区神出町）開墾事業があったことは間違いありません。果樹園とする計画でスタートした小束野を水田事業に変更し、初めて水田5町を拓き、溜池一箇所を築造したのが1916年でした。

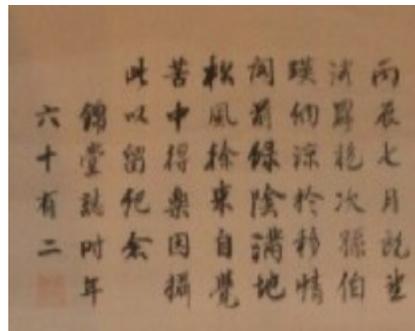
また、神戸華僑華人研究会編『神戸と華僑』所収、中村哲夫論文「呉錦堂」では、呉錦堂の「隠棲」に言及し、次のように記述されています。

「呉錦堂は、漢冶萍製鉄所の株式会社化とともに、大株主となり、在日理事として日本側と日中合弁を推進してきたので、最終の破綻にさいしても善後策をめぐら

していた。しかし、日本側が強硬に出て、対華21か条の要求を突きつけたため、中間の緩衝材の役目を果たしていた呉錦堂は、その面子を失う。還暦ということもあり舞子の移情閣に隠棲し、表面的な政治・経済活動から手を引くのは対華21か条の要求を転機としている、とみなしてもよいだろう。」

掛け軸は、このとき撮った写真をもとにして描かれたものと思えます。

（掛け軸の写真撮影は編集委員です）



大人物小故事 (7)

我的外公吳錦堂 曹愛德著

当「通信」では、第9号で曹愛德著『大人物小故事』を取り上げて以来、第10号、第12号、第13号で、合計6つの話を掲載してきました。本号でも、二つの話を載せました。お楽しみください。なお、日本語訳は編集委員が担当しました。ご叱正願います。(編集委員 橘雄三)

俭朴

我外公在日本致富后，仍不忘记节俭，穿着普通整洁，每天中午的饭菜一荤一素。常爱吃霉干菜烧肉，还习惯提着饭盒在桥上边吃饭边呼吸新鲜空气。无论参加什么酒宴，他的面前总要放一碗三北的特产。有一次，我外公作东请孙中山先生吃饭，在盛大的宴会上，桌面上放



【我的外公】

着一碟暗红色的霉干菜，与这宴席上的山珍海味相配显的很不协调。孙中山便好奇的问：“吴先生今日是守斋吗？”我外公就说：“孙先生有所不知，这是我托家乡人带来的特产，吃过这些酒菜，再咬咬家乡的菜根头，还别有风味呢。”上菜的厨工也在一旁解释说：“我外公一向自奉节俭，每逢设宴陪客，自己桌上总放一碟霉干菜，这是多年来养成的习惯。”孙先生听了以后，不禁肃然起敬！

我外公一贯教育子女勤劳俭朴，不要挥霍浪费，我妈妈记得小时候穿的衣服总是把旧的改成新的，大的改成小的，外公从不给孩子零钱花，以免养成坏的习惯。每次吃饭的时候，他故意吃的很慢，等我们吃完了，他就把剩菜剩饭吃完，给我们做榜样，教育我们要爱惜粮食，所以我妈妈多少年来一直这样，每顿吃饭总是吃的又快又干净！

有一次日本大正皇帝一位皇族，到神戸市舞子外吴锦堂的别墅来看望我外公，走到大门口，周围静悄悄，于是他就站在铁栅栏外向里边喊：“喂，里边有人吗？”听到声音，一位老人从花园里直起身来，叫仆人打开大门，请皇族到会客室和我外公见面，那位皇族仔细一看，刚才在花园里种花的正是我的外公！皇族便连连点头说：“好，好！”后来回到皇府，逢人就说“吴锦堂身为百万富翁，还那么朴素勤劳，亲自栽培花木，布置庭园，这种精神值得提倡，好好学习！”

質素儉約

私の祖父は日本で財を成したのち、なお、儉約を忘れず、普通のさっぱりした身なりをし、毎日、昼食は、魚や肉の料理一品と野菜やキノコの料理一品でした。いつも、霉干菜焼肉（訳者注：からし菜の漬物をかめの中に入れて密閉し、カビを生えさせたものを取り出して乾燥させたのが霉干菜。これに豚肉を加えて煮込んだ物）を好んで食べ、橋の上で、弁当を食べながら新鮮な空気を吸うのが習慣でした。どんな宴会でも、祖父の面前には、いつも、一碗の三北（訳者注：浙江省慈溪、余姚、鎮海の北部臨海地方を指す）の特産品を置くことが必要でした。あるとき、祖父は孫中山先生を食事に招待しました。盛大な宴会に、テーブルに出された一皿の暗紅色の霉干菜が、この宴会の山海の珍味と、いかにも釣り合いが取れないようにみえました。それで、孫中山先生は、好奇心から、“吳先生は、今日、精進齋を守っているのですか？”と訊ねました。祖父は、“孫先生はご存じないでしょうが、これは、私が郷里の人に頼んで持ってきてもらった特産品です。料理を食べてから、郷里の菜根をちょっと咬（か）んでみてください。また、特別な風味がありますよ。”と言いました。料理を運ぶ人も、傍から説明して、“主人はずっと大変つましい生活をしていて、毎回、客をもてなすとき、いつも自分で、テーブルに一皿の霉干菜を出します。これは、長年の身に着いた習慣です。”と言いました。孫先生は、これを聞いて、思わず、肅然と襟を正しました。

祖父は一貫して子女に、勤勉労働、質素儉約を教育し、お金の浪費を戒めました。母は小さい時、着ていた衣服は、いつも古いのを仕立て直したり、大きいのを小さく直したものであったことを、そして又、祖父は、それまで、子どもに小遣いを与えず、悪い習慣が身につかないようにしていたということを知っていました。いつも食事の時、祖父は、わざとゆっくりと食べ、私達が食べ終わるのを待って、私たちが食べ残したおかずやご飯を食べ切り、私たちに手本を示し、食べ物は大切にしなければいけないと教育しました。それで、母は長年、ずっと、このように、食事はいつも、速く、綺麗に食べました。

こんなことがありました。

(以下、日本語訳は次頁右下へ続く)

大人物小故事 (8)

我的外公吴锦堂 曹愛徳著

ここでは、「寛容」を載せました。お楽しみください。

寛 容

我妈妈说童年时代，她住在日本神戸兵庫县下舞子松海別墅，那里山青水秀，风景优美，后来改建成“移情閣”，现在是国父孙中山先生的纪念馆。

记得有一次吃中饭时，餐厅里一桌菜已经摆好了，当佣人揭锅准备盛饭的时候，我外婆闻到一股扑鼻的焦味，很不高兴地说：“饭焦了，不能吃！”而外公却端起了饭碗边吃边说：“好香！好吃！”那时我外婆更生气了，便厉声对边上的佣人说：“快把厨师叫上来！”厨师预感到情况不妙，轻则是训话，重则要丢饭碗了，只好战战兢兢地上来，见到我外婆的脸色，更是吓得直哆嗦。

而我外公在一旁不慌不忙，不但不责怪，而且说：“你烧饭是很辛苦的，大概事情多，一不留神把饭烧焦了，但下次做事一定要专心。我吃不要紧，但阿婆是不要吃的，你快下去煮一碗饺子吧。”这时，外婆就说：“算了吧！”于是外公就眨眼暗示厨师快离开。外公见外婆收住了怒气，就让大家开始用餐。由于外公的宽容，一场小风波就平息了。我妈妈这才松了一口气开始吃饭



【我的外婆】

心里特别特别地佩服外公有这么一颗爱人的心，宽容的心。

寛 容

私の母は次のように言っていました。子ども時代、日本の兵庫県下、神戸市舞子にあった松海別荘に住んでいました。そこは、山紫水明、景色は非常に美しく、後に改築されて“移情閣”となり、今は国父、孫中山先生の記念館になっています。

ある日の昼食時のことを覚えています。食堂には一卓の料理がちゃんと並べられていて、使用人が、鍋の蓋をとってご飯を盛ろうとしたとき、祖母は、焦げた匂いが鼻をつき、不愉快に感じ、“ご飯が焦げている。食べられない！”と言いました。でも、祖父は、却って、ご飯の碗を持って、食べながら、“いい匂いだ！おいしい！”と言いました。その時、祖母は一層、腹を立て、声をとがらせ、傍らの使用人に、“すぐに、料理人を来させなさい！”と言いました。料理人は、悪い予感がし、軽くて小言、重いと仕事を辞めさせられるだろうと、びくびくしながらやって来て、祖母の顔色を見て、一層驚き、震えが止まりませんでした。

それでも、祖父は傍らで、慌てず騒がず、咎めるどころか、“ご飯を炊くのは骨が折れるだろう。おそらく、仕事が多くてちょっと油断して、ご飯を焦がしてしまったのだろう。これからは、専心注意なさい。私はこのご飯でかまわないが、お婆さんは食べられないようなので、すぐに厨房へ行って、餃子を一碗つくりなさい。”と言いました。このとき、祖母は、“もう、いいです！”と言いました。それで、祖父は、料理人に、その場を離れるように目配せして、それとなく知らせました。祖父は祖母の怒りが収まったのを見て、みんなに食事を始めさせました。祖父の寛容によって、小さな波風はおさまりました。母は、やっと、ほっとして食事を始め、心で、とても、祖父のこのような人を愛する心、寛容の心に頭が下がりました。



前頁、第7話「質素儉約」日本語訳の続き

日本の大正天皇の皇族の一人が神戸市舞子郊外の呉錦堂の別荘に祖父を訪ねて来られ、大門に着くと、周囲は静寂で、その方は、鉄柵の外に立って、“誰かおられますか？”と呼ばれました。その声を聞いて、一人の老人が庭園で立ち上がり、下男に大門を開けさせ、皇族の方を応接間へ案内し、面会しました。皇族の方はその仔細を見て、さっき庭園で花を植えていた人こそ、私の祖父、呉錦堂だとわかり、何度も何度もうなづきながら、“すばらしい、すばらしい！”と言われました。のち、皇居に帰って、会う人ごとに、“呉錦堂は百万長者になっても、あんなに質素勤労、自身で花木を育て、庭園の手入れをしている。この精神は、提唱に値するし、よく学ぶべきだ”と言われました。

一枚の写真 — どの人が梁啓超(りょう けいちょう)？ —

この頁は次の記述に対する興味関心から生まれました。「1900年、神戸に華僑の学校である同文学校が発足している。(中略)その契機は、1899年5月に、梁啓超を神戸に講演に招き、その熱心な提唱により教育活動が開始されたことによる。(中略)このとき、呉錦堂が梁啓超を自宅(現、神戸市中央区中山手)に招待し、その庭で梁啓超を取り囲み多くの華僑と共に写した記念写真が移情閣に展示されている(中村哲夫著『移情閣遺聞』阿吽社、1990年発行、54頁)」(編集委員 橘雄三)

《梁啓超と呉錦堂の交わり》

康有為に従い戊戌変法に参加、失敗して日本に亡命していた梁啓超と呉錦堂の交友には、非常に興味深いものがあります。中村哲夫先生は、平成9年3月発行『近百年日中関係の史的展開と阪神華僑』「梁啓超と呉錦堂」においても上記写真に言及し、この写真の存在について、「神戸華僑の篤学家、陳徳仁先生の収集のおかげ」と記されています。同論文において、続いて中村先生は、梁と呉の交友を裏付ける文献史料として、台湾の中央図書館が所蔵する張子文主編『梁啓超知交手札』1995年刊に収められた「呉作鏞の梁啓超あて書簡」を取り上げ、二人の交友、及びその背景について論述されています。

《いつ、どこで撮った写真？どの人が梁啓超？》

話を写真に戻します。私は先日、神戸華僑歴史博物館で、ガラスの額に入ったこの写真を見る機会がありました(現在、この写真は展示されておられません)。陳徳仁先生(神戸華僑歴史博物館初代館長)が、額に入った写真のガラス越しに番号を貼って、別に名前をメモを付けておられます。そのメモでは、1 呉錦堂、2 呉啓藩、3 鄭亮筠、4 杜蓀伯、5 梁啓超、6 徐蓀初、7 麦少彭などとなっております。ところが、一番知りたい梁啓超の5の番号が剥がれておりました。これについて、写真を添え、狭間直樹先生(元孫文記念館館長)にお訊ねしたところ、次のような返事をいただきました。

「十年前、(日訳)『梁啓超年譜長編』を刊行したときに、各巻巻頭に関係写真を掲げることし、華僑歴史博物館も調べさせていただきました。そのときに、添付の集合写真も見ました。私の記憶では、1の右前が梁啓超に比定されておりました。翻訳メンバーで検討しましたが、当時あつめていた梁啓超の写真とはかな

り違う顔立ちなので、これは間違いと判断しました」狭間先生からお返事をいただくまで私は、撮影年月を、梁啓超が神戸へ来た1899年5月として、呉錦堂は「44歳にしてはちょっと老けている。覇気に欠けるなあ」とか、呉啓藩は「1894年生まれなので、間違いのないなあ」など、あれこれ思っておりました。ここに梁啓超が写っていないとなると撮影年月が定かでなくなり、状況も変わってきます。

また、撮影場所について、三江会館の姜成生理事長にこの写真をお見せしたところ、「中山手に呉錦堂の自宅があったとは知りません。この写真の場所は、中華会館のトアロードを隔てた西北、広東村と言っていたところ、今は再開発が進みビルが建っているあたりであった建物で、倶楽部として使用していたところではないでしょうか」とおっしゃる。

写真の出处ですが、この写真は孫文記念館の資料室にもあって、こちらには裏に「2009年6月2日、霍兆翔氏寄贈」と記されています。また、同写真は、(財)孫中山記念会2002年発行『兵庫県と広東省交流の百年』にも掲載され、1の右前を梁啓超としています。なお、写真出典：鴻山俊雄『神戸大阪の華僑』華僑問題研究所、1979年と付記されています。

残念ながら、よくわからない写真です。

このテーマについては、『神戸華僑歴史博物館通信 NO. 8』の久保純太郎特別研究員の文章も併せてご覧ください(ネットでアクセスできます)。



人物の番号は、ガラス額上の番号をもとに編集委員がパソコンで付したものです